薩隅日肥 行軍日誌

白河次郎

我校例に依り、今秋十月十一日を以て行を啓き、一旬の間、脩學旅行を薩隅日肥の地に行なふ、此四洲の地は、古へより幾多俊傑を出すの地なり、山高く水長く、秀靈清淑の氣、其地に磅礴せるを覺ふ、其之を寫す固より敏腕練達の士にあらざれば能はず、而して余不文、今敢て非望を企だつ、心窃に之を耻づ、然れども此地他日復至るや否やを期せず、今幸に其風物に接せるを得、乃ち其梗概を錄して以て後日の追憶に供せんと欲するのみ。稿成り、通讀一過、益々其至らざるを覺ふるや、之を燒かんと欲するもの再四。

露枝風葉、灝氣人に逼り、天地肅殺、自から秋の闌なるを報せり、神氣清澄、所謂秋高く馬肥ゆるの候、志士當に野に出でゝ古を吊すべきの期あり。乃ち長途旅行を鹿兒嶋地方に行なふ、議成る、百二都城の秋色今如何、思ふて此に至れば、踴躍奔狂、意馬麗城を馳せ、心猿城山を攀づ。

十一日

午前四時半、喇叭曉風に冴ゑて、頻りに結束を促がす、乃ち床を出で、先づ窓を排して天色を窺へば、滿天晦暝、恰かも昨年の當日に似たり、鹽嗽朝餐を畢へ、裝を治めて出づれば、校燈両個、高く門頭に揭げ、宛然我行を壯とするものゝ如し、而して天候益々惡し、既にして漸やく天明くる頃ひ、號令一發、肅然前庭に列す、恰かも、勇氣勃々、將に躍らんとするの駿馬を控えて、其當に發すべきの期を待つものゝ如し。全員を編して一中隊となし、秋山助教授之を率ゆ、更に之を四中隊に分つ、一小隊は之

を左右の半小隊となし、半小隊は更に之を二分隊となす。隊伍既に定まる、是に於て嘉納學校長、親から其長を命ず、曰く喜入秀三汝は以て第一小隊に長たれ、曰く安住時太郎汝は以て第二小隊に長たれ、曰く林市藏汝を以て第三小隊に長たれ、曰く梅野實汝は以て第四小隊に長たれ、曰く誰、曰く某、其餘分隊長に至る迄、皆悉く定まる。是に於て嘉納校長は、前面に立ちて告げて曰く

我校本日を以て修學旅行の行を啓く、蓋し文部指定の方針と、我校平生の旨とする所に依るなり。亦是れ一種の課業に外ならず、諸子は此行を以て、苟も漫遊となすべからず、されば、其目に觸るゝ所、其耳に聞く所、以て益すあれば、採りて之を錄し、以て他日の參考となすべし。而して更ゝ注意すべきあり、抑も我校は、九州各縣の爲めに立てらるゝもの、諸子は卽ち九州各縣によりて養はるゝものなり、是を以て、經る所の各地、皆諸子が言行風紀を熟察ゑて、以て我校を立つる所の旨に背くなきや否やを視ん、諸子其れ之を体せよ。云々

此時小雨遂に降り來れり、校長は細雨纖々の中、手に龍旗を握り、更に告げて曰く、

我校已に我校の精神を有す、然らば則ち、之を表旌するものあらざるべからず、頃日龍南會委員、一旗を作り、以て校旗となさんと乞ふ、龍南會は卽ち我校の精神なり、乃ち之を許し、以て之を修學旅行に用ゆ、此旗の向ふ所、是れ我精神の向ふ所なり、諸子は此旗に對すること、亦我校に對するが如くなるべし、既ゝ我校の精神なり、其旗手たるもの固より撰ばざるべからざるなり、

誰か此の名譽ある旗手たるものぞ、校長は更に語を次で曰く、

田中尙志、膽氣用ゆべきを、乃ち彼を以て此旗手さるを命ず、

田中尙志をして列を進ましめ、更に聲を大にして曰く、

之を汝に委す、汝其れ之を死守すべし、

と、捧銃一番、旗手は之を護ゑて列中に復す、是に於て隊形全く備はる。卽ち令を發し行進を始む、喇叭嚠喨、蹶然隱栖を出でゝ千里龍蛇に駕するの思あり。想起す丁丑の役、數万の健兒が「咄嗟曉出鹿兒嶋、絕叫夕度太郎山」、唾手直に扳がんことを期して我熊城に來るや、豪氣堂々、意氣頗ぶる高きを覺ふ、今や事時と共に異なりと雖ども、其氣慨や卽はち一なり。嘉納校長以下、役員を合して無慮二百有餘名。

洗馬に至る時、大雨俄に至る、乃ち小憩を命じ、負ふ所の外套を着けしめ、復た隊を整へて發す、高橋に一憩し、十時百貫に達す。此間「西風戰樹雨聲寒、坐覺蕭々秋色闌、」小雨時に熄み、時に降り、濕氣肌に徹し、而して道路濘惡、肝以下之總て飛泥の侵す所となる。至れば則ち、舟子艫を擁して待つ、乃ち之に移る、小艇十八艘、前後相追ふて出づ、而ゑて雨益々盛んに風も亦起る、僅に盜嶋を過ぐれば、濁浪奔馬の如く、來りて我船に當り、泡沫飛散、全船屢々水烟の裡に沒す。波濤高うして氣勢益々雄壯、鯨波頻りに起る、或は舷を槁ひて歌ふあり、或は劍を撫して吟ずるあり、前船は後船を招き、後船は前船を呼ぶ、試みに陸上より之を望まば、源軍屋嶋を襲ふに擬せんか、然らずんば蒙古の船艦を亂る當年の九州男子に比せんか。忽ち彪然たる巨船の吾に當つて泊するを見る、知んぬ平軍の船か、然らずんば蒙古の兵船か、是れ蓋ゑ吾行の爲めに來れる濱船崇敬丸なりき、卽ち之に搭ず、時辰正に十一時。

崇敬丸は噸數三百を超へ、馬力之に適ふ、元と外國軍艦の輜重船なりしが、今は協同組の有となるり、堅牢無比、以て怒濤を凌ぐに足るべし。一行の搭じ終るや、滊笛長鳴、直に錨を拔ぐ、「宇土天草の山々の、送り迎えをみ角おる、」瀨戸打過ぎて進み行けば、島陸相迫り、僅かに航路を通ず、而えて兩岸の烟樹、雨を含みて益々艶を添ふ、蓋し柳の瀨戸なり、之を過ぐれば眼界少しく開く。風雨猶未だ已まざれども、波甚はだ靜なり、蓋し兩陸相擁えて、海恰かも大湖の如きを以てなり。

遠山縹渺、今方に煙雨の中にあり、嶋嶼散落、四方に隱見す、遠くして小おるものは小鳥の如く、其大なるものは鯨鯢の半身を現はすが如く、一動一搖、波間に出沒す、近くして小なるものゝ人の如く、其大なるものは家の如く、或は列を爲して行くが如きもの、或ゝ兩々相對するもの、或は波の爲に其半身を殺がるゝもの、或は肉落ち骨露るゝもの、或は蒼松岩角に突出するもの、千狀万態、變幻狀すべからず、曰く稻荷島、曰く白嶋、曰く水嶋、曰く高嶋、曰く茶瓶島、曰く大嶋、曰く屋嶋、曰く何、曰く何。點々指呼の間、舳頭に起つて望めば、海風雨を誘ふて、來つて面を撲つ、其快言ふべからず「秋寒し海上千里雨の中」。時未だ四時を出でざるに、船僮顚りに晩餉を運び來る、其故を問へば曰く、黑の瀨戸既に眼前にあり、之を過ぐれば波益々高く浪愈々荒しと。

船大門岬頭を過ぐれば、高く呼ぶものあり、曰く、失箐岳見ゆと、山は肥薩の境にあり、其名古歌と共に高し、今詳に其山勢を見んと欲すれば、陰雨何の無情ぞ、山は微茫縹渺の中にあり、然れども譬へば簾を隔てゝ美人を望むが如く、其方物すべからざる所、却つて幽邃高雅の妙あり。快駛數十分、忽ち

両岸相迫るの境に至る、潮流甚だ快迅、之を船僮に問へば、曰く、黒の潮戸なりと、黒の瀬戸一に隼人の瀬戸と云ふ、航海者の最とも難絶と稱する處なり。両岸には巉巖突兀、或は高く、或は低く、牛れ如きものあり、虎の如きものあり、或は彎々として海に落つるものあり、或と翛然として洞をなせるものあり、急潮は龍の如く、其間を來去し、而して怒濤の來りて石ゑ激するを見れば、恰かも龍虎相爭ふが如く、口角沫を嚙むが如きものは水烟の散ずるなり、怒號高く聞ゆるものは激潮の聲なり。漁家三四、處々に點在し、潮聲松韻両つながら海村の凄色を添ふ。之を過ぐれば、眼界頓に濶大、横に際涯を知らず、而して波濤洶湧、澎湃奔盪、前に船僮の語れるものゝ如し、船に習はざるもの已に嘔吐を催さんとするものあり、而して日も亦漸やく沒せるを以て、乃ち蹌踉船室に入り、以て寢に就く、滿船寂寞、只機音の轟々と、怒濤鞳鞳の聲を聞くのみ。

十二日

前三時、夢始めて覺む、即ち起ちて甲板に出づれば船ゑ已に灣口にあり、而して天空洗ふが如く、前の陰雲を見ず、皓月高く懸り、海色恰かも畫の如ゑ、海門岳は高く海表に聳へ、勢甚はだ勇壯、佐多岬頭の燈台は、高く明を放て吾を迎ふるが如く、東方一帶、遙に種子が嶋を見る、金波萬頃、景致絶佳、而して漁村今正に鼾睡の中にあり、此の如きの風物総て吾一行に附與す。

天明鹿兒嶋港に入る、即ち小艇に移り、前後陸に上る、上陸悉く終ゑ、隊を埠頭ゑ整へ以て發す、此時天色復曇り、前の晴色を見ず、而ゑて小雨之に加はる、雨を衝いて行くこと十數町、仙石馬場に至り、隊を解いて各々宿に就く。

鹿兒島と鹿兒嶋灣上にあり、前に櫻嶋を望み、背に城山を負ふ、甲突川其右を流れ、吉野一帶の山其左に欹ち、以て自然の良港をなし、以て自然の城堡をなす、慶長中、家久公城を此地に築きしより、嶋津氏累世の居城あり、戶數九千許、人口五万餘、街衢端正、市道垣濶、其家屋は概ね石材を用ゆ、艶麗優美の風なきも、宏壯簡勁の風あり、其俗質直、勇敢義に富む、優に西海に雄鎭たり。

本部令を傳へて隨意散步を許す、乃ち三々五々、相携へて市中に散策す。

照國社は城山の麓にあり、樓櫓輪奐の美なしと雖ども、自から清秀高崇の風あり、別格官幣社に列せらる、蓋し齋彬公を祭るもの。公の偉勳は世已に之を稱す、亦何をか言はん。參拜し終り、出で、山下公園に至る、園は近年の創置に係る、老樹古色を帶ぶるなきも、參差縱摸、松柏杉檜を植へ、絶えて春花秋葉の艶樹を見ざる所、却つて幽遽閑雅の妙あり、加ふるに地勢高塏「千里風光眞一望」、遠く海上落帆の還るを望み、近く白堊高樓の櫛比せるを見る、亦是れ一個の好寰區なり。

午下、小雨濛々、時を經て止まず、出でゝ步まべからず、是に於て悉く旅窓に輾轉し、徒に圖籍を按じて談ずるあるのみ。

十三日

雨霽る、令あり曰く、午に至る迄猶隨意散步を許す、若し午に至らば當に本部に來集すべしと。乃ち相携へて先づ鍛治屋町に至る、町は城の極北にあり、甲突川に沿ふ、平然他の奇なし、然れども維新の俊傑十餘名、皆此境より出づと云ふ、南州甲東誕生の地は、今碑を建てゝ以て紀念に資す。是より松原通にある、松園寺に至り、月照の墓に謁す、茫然たる一孤墳のみ、絶えて酹者を見ず。

午に至りて歸り、餐を終へ裝を治めて、悉く本部に參集し、整然列をなす、會ま川上造士館長の來れるあり、嘉納校長は氏を一同に紹介し、氏は列前に立ちて一行の來を勞ふ。是よゞ市街を魚貫して、紡績場に至る、場は磯村にあり、巍然たる石造の大厦なり、少時休憩を取るの後、社員數名、分つて一行を導く、先づ綿花を取りて之を精製し、次に之を取りて紡績に附す、甲より乙に移り、乙より丙に至り、太糸小糸縱横ゞ流轉ゞ、疎より細となり、細より精となる、而して一に瀛力の助を籍る、工夫三十余名規模甚はだ壯大ならずと雖ども、其創立は早く慶應にあり、資五十萬両を要せりと、今や業務少しく衰ろへ、一日の量僅かに百貫目に過ぎずと云ふ、觀全く了り、出でゝ製鉄所に至る、亦石造の厦屋なり、或は火爐を盛にゞて鐵器を鎔鑄し、或は水力を利用して之を鉋鑿鍛錬す、亦是れ慶應年間に成れるもの、始めは砲銃を鑄造し、後造船處となり、或は硝藥製造處となる、丁丑の役賊の用ひしもの皆此場の製のみ、而して今は僅ゞ些少の鐵器を製作し、昔時の餘喘を保つのみ。

余曾て思ふ、薩州の薩州たる、唯善く武を用ゆるに依るのみと、圖らざりき、文明の事業は、早く慶應の當時にありて、己に此れ若きに至らんとは、薩州の男子何の烱眼ぞ、世人と更ゞ二十餘年を經て、漸やく公等の爲す所に倣ふ。

巡覽既ゞ終り、出でゝ歸途に就く、田の浦に到れば、舊藩士某の來て待つに會す、是より先き、本部造士館に請ふて、英艦砲擊の事を審かにするものを要む、某の來る蓋し此に因るなり、乃ち側らの小丘に上り、以て其談を聽く、某徐ろに說き起して曰く、英人妄狀、我の生麥を過ぐるや、暴を我に加ふ、我隊士怒つて之を斬る、是より英人夫に我を惡む、

我も亦大に之に備へ、盛ま海防を嚴にせ、今當時砲臺のある所を示さば、此丘の麓、青松亂生ち、地勢深く海に走るもの、之を祇園洲となす、帆檣林立の間、石堤相擁して出で、儼然として海中に立つもの、之を辨天波戸となす、之と相對し、遠く相應ずるもの、之を天保山となす、櫻島の右、林樹叢をなすもの、左なるを笹嶋と云ひ、右なるを冲小嶋と云ふ、青螺一點、遠く其右に浮ぶもの之を神瀬と云ふ、其他両三を合せ、東西相應じ、日夜髀肉を撫し、砲門を清めて以て英艦の來襲を待つ、文久三年六月二十七日、英艦七艘來りて谷山に泊す、彼此往復、談判未だ調はず、七月朔日、英艦夜に乘じ、我が天祐白鳳青鷹の三艦を奪ふ、翌日、風雨晦暝、我兵士雲霧の間より、望んで之を知り、奮起震怒、八砲臺均しく砲擊を始む、英艦其不意に驚き、急に錨を斷ちて逃れ、火を我三艦ま放ち、退いて磯(地名)ま屯し、七艦を編して一列となし、頻りま我砲臺を繰擊す、砲聲は風雨の聲に激し、砲烟は雲霧の中に簇す、而して彈丸の空に破烈すると、恰かも電光閃々百雷の一時に來るが如し、乾坤總て修羅道となる、午より申に至り、輸贏終に決せず、死傷相當る、此日英艦一艘、祇園洲に坐し、復轉ずべからず、勢甚はだ危ふかりしに、我祇園洲砲臺も、砲門既に破れ、彈丸亦盡き、終に之れを擊破すること能はざりき、一艦直に來りて之を援ひ出せり、日暮七艦皆相率ひて去る、翌三日、風雨漸やく止む、英艦復來りて我を砲擊す、我砲臺も亦之に應ず、戰未だ酣ならざるに、皆南に去れり、其夜七嶋灘に泊し、四日夜に乘じて去る、一艦猶ほ小根占に泊し頻りに收繕を務めしが、六日に至り、一艦南より來り之を援ひ出せり。

現場に臨んで此快談を聞く、恰かも目其狀を覩る

が如し、二行悉く奮起振興す。某は當時親しく天保山に砲手たりしと。

是より丘に沿ふて、田の浦の陶器工場に至る、場は主として美術裝飾の器を作る、一對の花瓶四百金を値するものありと云ふ。場を出で丘を下りて祇園洲砲臺の址に到り、佇立徘徊し、眼を海上に放てば、人をして復た當年の事を懷はしむ、「硝烟彈雨既春夢、八砲臺邊海氣高。」此地又丁丑の役官軍戰死者の墓地あり、淺沙稚松、國士數百人を葬むる。喇叭一聲、全員を招集し、隊を整へて市中に入り、直ち右に折き、行くこと數十丁、三時長谷場に到る、嶋津氏累代の菩提處なり、石壁儼然、以て市塵を隔て、門扉長く開かず 以て空寞を守る、衛人に請ふて門に入る、僅かに境に入れば、砂上等痕を印し、落葉地に布かず、老樹森々れ中、處々ゟ塋標を認む、皆累世の諸公を葬むるもの、乃ち墓下に就き、一々長揖して過ぐ、久光公の墓に到り、公が維新亂麻の内に在りて、終に其偉勳を全ふせるを想起し、低回去る能はず、依て思ふ、石標六尺、僅かゟ公が靈を此陰鬱の地に眠らしむと雖ども、公が紀念碑は、未だ人衆輻湊の地に建てられざるなり、公が銅像と、未だ街巷繁華の境に設けられざるなり、世人は公が大業を知らざるが爲ゝ、蓋し大に怪ゑむべきにあらずや、然れども、退いて之を思へば、是を蓋し公が爲めに用ゆるなきなり 何となれば、明治以後の日本と卽ち公が銅像にして、維新の歷史は、卽ち公が紀念碑に外ならざればなり。

參拜既に終り、出でゝ淨光明寺ゟ到る、石磴を拾ふこと數百級、丘上ゟは西鄕隆盛、桐野利秋、篠原國幹、大山綱良、以下俊傑數百の靈を葬むる、靜意四來、悲風墓門に入るを覺ふ、此輩皆拔山の力あり、蓋世の氣あり、嘗て豪膽群囂を壓し、又嘗て迅勇駿

雷を掣す、然りと雖ども、一たび九泉に去つて万事已みぬ、皆無限の怨恨を齎らして此中に眠るを見れば、誰か北邙の情に堪へんや。酹者絶ゆるなきか、墓前常に香花を見る、昔者項羽、江東八千の子弟を殺し、其父兄に面するを恥ぢて自刎して死す、今南州は、麗陽一萬の子弟を殺さ、其父兄猶彼を慕ふこと此の若さ、南州も亦稀代の英傑なる哉。

是より岩崎谷に至る、城山と岩崎山との間にあり、三面峭壁、一方吉野に向て開く、窈然たる一凹壘れみ、此と是れ當年麗陽悲歌の士が、倜儻の氣稟と、強悍の身幹とを以て、薩隅日肥の間に轉戰し、刀碎け弓折れ、終に此壘に窘縮し、一朝北邙の烟と化せし處、志士爲めに一滴の涙なきを得んや、今や物在り人亡ぶ、龍拏虎擲之を何くにか求めん、悲風亂松を度り、咽聲石泉よあるを覺ふ、偶ま山腹處々に土窟を見る、之を導者に聞々ば、南州等の依て以て彈丸を避けし處なりと云ふ、當時の勢亦哀しむべき哉、導者は今造士館の校僕なり、當時南州の厠丁たりしと、是を以て、南州平生の行事と、城山沒落の當時を語りて已まず。

詩人曾て南州を歌ふて曰く、「大島囚徒今義士、麗城叛賊昨名流」と、彼は嘗て桃李滿開の春を經、忽ちにして梧桐搖落の秋に遇ふ、若し夫を、市井横議の處士、大島三左衛門を之て、風雲に際會するなからしめば、焉くんぞ堂々たる他日の正三位陸軍大將參議西鄕隆盛を見るに至らんや、仮令一朝身を退らしむるも、一虎怒らず長く南山に住せしめ、山月を仰いで其殘生を送らさめば、何ぞ叛賊の汚名を青史に垂れしむるに至らんや、彼が戊辰の功名は天と共に盡ぎじ、然れども丁丑の汚名は地と共に變せざるなり、彼を思ひ此を想へば、轉た人をして嘆慨に堪へざらさむるものあり、聞く變幻極ま

りなきは英雄の事なり、末路悲ゑむべきは豪潔の常なりと、彼も亦終に此をして名言たらしむるものか。

是より溪を溯り、叢林の間を縫ふて背後より城山に上る、已に疎鐘落日を送るの時なり、山上より三州の江山を望見すれば、轉た「望迷日薩舊山河」の觀あり、今試に丁丑の戰況を按ずるに、當時四面皆壘壁を築き、處々に鹿柴を植へ、全山繞らすに五重の竹柵を以てし、釘板を敷き、陷穽を穿ち、攻擊晝夜を分たず、而して第三旅團は、右は海濱より、左は西田橋に到る迄、甲突川に沿ひ、別働第二旅團は、左翼之に接し、右翼小野村に達し、第二旅團は丸岡山より滑川に至る一帶の地に陣し、別働第一旅團と城の東門に、新撰旅團と米倉に陣す、之と復線をなすものは第四旅團にして、多賀鳥越の諸山に連なる、貔貅十万、以て城山の一孤壘を包むと、今此地に來り、江山の地勢を察ゑ、當時諸壘の在る處を指點せば、人をして坐ろに當年の秋色を追懷せしむ、偶ま「流星一閃射城山」の詩を吟じ來れば、懼然毛髮の颯たるを覺ふ。暮色蒼然たるに及び、倉皇山を下りて寓に歸る。

此夜深更、月光牕を照す、卽ち起て窓戸を排すれば、一痕城山の上に高く、秋陰薩天に逼るを見る。

十四日

晴、本部令を傳えて曰く、本科生は今直ちに參集せよ、將に造士館の授業を見んとす、豫科及補充の生徒は、午に至る迄隨意散歩を許す、正午各隊皆本部に來集すべしと、是に於て、白三條の帽子は整然列をなして造士館に向ひ、他は各々其好む所に至る、或は再び杖を祇園洲に曳くものあり、或は復た城山に吊するものあり、或は扁舟を雇ふて櫻島に向ふものあり。

櫻島は大隅國に屬す、鹿兒嶋を去る一里許、呼べば將に應せんとするの處にあり、周回十里餘、戸數二千五百、人口一万五千を有すと云ふ、天平寶字八年、薩隅の海中烟雲晦暝、已にして砂石堆成し、以て此嶋を生出すと、全嶋總て火山質に屬さ、加ふるに灌漑の便なく、以て米穀を生ずべからず、僅かに砂糖烟草菽麥蘿蔔の類を産す、然れども其蘿蔔と所謂櫻嶋大根なるもの、其最なるものに至りては、大人の一抱に過ぐるものありと云ふ。櫻嶋岳は其中央に屹立す、高さ三千六百尺、其頂は恰かも巨人の天を仰ぐが如し、史に徴するに、紀元二千百二十八年、始めて烟を噴き、爾來屢々間斷ありと雖ども、噴烟今に絶えず、山上には池沼あり、其虚盈恰かも海潮に應ずと云ふ。

正午、各隊皆集まる、乃ち伍をなして先づ師範學校に至る、學校は男子部女子部及附屬小學あり、教場寄宿舍等、皆頗る整頓せるを覺ふ、參觀を終り、導かれて休憩處に至れば、茶を煮て頻りに之を薦む。已にして之を辭し、出でゝ造士館に至る、門を入れば館の生徒二百餘名、両側に整列して吾を迎ふ、禮して過き、直ちに講堂に入る、講堂は宏壯輪奐、廣さ數百人を容るべき、今一行の爲めに休憩所に充つ。

造士館は城山の麓にあり、地勢高塏、觀望極まりなし、近く麑城の市街を一瞩に集め、烟雲蒼茫の裡、遙かに薩隅の連山を望む、櫻灣の海潮は呑吐其中に入り、白帆靜かに太平洋の浪を破りて歸る、而して櫻嶋岳は門に當りて高く天を貫き、氣勢日星に逼る、江山鍾秀、眞に偉人を出すべきの地なり、來りて此校に遊ぶもの、亦欽羨すべきかな。

是々徐々導かれて教場寄宿舍器械室等を觀る、校

舍清麗、次序整正、亦た鹿陽の最高學舍たるに耻ぢず、之を他の高等中學ゑ比するも、或は遜色なからん。參觀を終り再び講堂に歸れば、我校の職員と高段の左側に列し、館れ職員は其右側に列し、中央ゑは一士の机に依りて立つを見る、蓋し我嘉納校長の囑に依り、薩藩鄕土史を談ずるなり、談ずるものは誰ぞ、館の助敎授瀨川小石麿君なり、乃ち耳を欹てゝ聽く、

明治維新に際し、人材は續々として此藩中より輩出せり、此等の人士は果して如何なる敎育を受けたりしか、蓋し三種の敎育ありしなり、

一、造士館、

二、演武館、

三、民間れ敎育、

一、造士館。今を去ること一百十九年、卽ち安永二年、嶋津家二十五世の大守、三位左近衛中將重豪公、治下士臣の爲めに、始めて此館を創建す、爾來連綿、明治四年に至り、廢藩置縣と共に、一旦廢絕に歸せしが、十七年、公爵忠義公、巨金を投じて之を再興し、以て縣立中學となす、同二十年、高等中學の制となし、以て今に至る。舊藩時代に於ける本館の制度は卽ち左の如し、

敎課書。孝經、小學、四書、五經より和漢諸史ゑ涉り、併せて習字、作文、詠詩ゑ及ぶ。（式日には四書、五經、左傳、令義解、等の講義あり、）

授業時間は、巳より未に至る、午前は素讀を敎へ、午后は講義をなす。

敎員は、敎授、助敎、訓導師、都讀、句讀師、句讀師助、句讀師寄等なり。

生徒は、城下士族及諸卿大身の子弟にして、八歲より二十歲に至る。

經費は、總て藩庫よりせ、束脩月謝なし。

試驗は、春秋二回とす、藩主は常に之に臨む、或は吏を派して臨時試驗を行なふことあり。

齋彬公は、此館の課目、洋學及數學を加ふ。

二、演武館。本館も亦重豪公の創建にして、造士館と相並びて、弓馬槍劔薙刀柔術及砲術を授く、其教師と所謂師範家にして、平日は其道場に於て、其門弟を訓導し、式日に至り、各々之を率ゐ、館に就いて其武を講ぜしむ、藩主亦之に臨む。

（本館は廢藩と共に廢絶す）

三、民間の教育。城下を除き、藩内を分ちて百二十四鄕となし、士族の住居する處は之を麓と云ふ、各々文武黌ありと雖ども、前二館に就らんとするものは、皆之を許せり、然りと雖ども平民に至りては、決して卿士と伍するを得ず、僅かに寺院若くは寺子屋に就て、筆筭文學を修むるのみ。

城下の士族には數等の階級あり、其内、小番新番小性組の士族を分ちて數十組となし、其一を鄕中（ゴヂユ）と云ふ、同鄕中は交際と甚はだ親密にして、緩急相救ひ、終身同胞に異ならず、然れども他の鄕中を見ること仇敵の如く、文學武藝より、以て其風紀に至る迄、敢て或と劣るなからんと期す。

鄕中には社を立て、修學講道を務む、其社員と六七歳より二十歳に至る、皆鄕中の規約に從ひ、毎日巳より未に至る迄は、社に出で文學を學び、未より申に至るまでは、自宅にありて之を温習す、申の上刻より、兒（チゴ）（十五歳以下を兒と云ふ）を集めて遊技を爲さしめ、下刻より武藝を練習せしむ、二歳（ニセ）（十五歳より二十歳に至る之を二歳と云ふ）は常に兒を看護教導す。二歳等も亦毎夜相集まり、互に文學を講じ、士道を研究す、之を夜話（ヨバナシ）と云ふ、式夜には、經書軍書等を輪講す、講を終り、若し存寄（ゾンジヨリ）ありと云ふものあれば、即ち所謂鄕中吟味を開く、此吟味により士風の萎微

せるを救ひ、怠惰不德の社員を戒しむ。

鄉中の規約は、各々小異ありと雖ども、其の大要は、忠孝を重んじ、信義を守り、文武を練習し、人倫を正し、長老を敬ひ、幼弱を愛撫し、廉直を重んじ、實直を尊び、禮讓を失なとず、遊惰に流れざるを以て目的とせり。云々

當時教育の風已に此の若し、薩の人士、終に天下に雄飛するに至る、亦怪しむに足らざる也。

既にして川上館長より菓子數個、館の生徒より甘諸數顆を贈る、卽ち之を食ひ、隨意解散を以て館を辭し、以て宿に歸る。

十五日

晴、七時隊を整へ、七時半埠頭に至る、造士館の教授野村笠井の両氏は送りて此に至る、是より二艘の小蒸滊船を雇ひ、各々一艇を繫ぎ、分つて之に乘ず、八時纜を解く、埠頭を出て、顧みて麑城の風物を望めば、皆我に意あり、頻りに其別を悲しむもとゝ如し。

此日滿天片雲を停めず、深潭清澄の如く、而して海色碧膏を凝らし水波驚ろかず、青天碧海、両々相映ず、遠嶋の漸やく來るを望めば、翠より碧となり、碧より藍となる、近山の漸やく去るを見れば、鮮よりも淡となり、淡よりも茫となる、而して船多くば陸に沿ふて行き、「看取汀々浦々秋」。

大崎に至り、「曇りなき心の月」、薩海の波間よ沒せるを追懷し、「鐵衣未着僧衣破」を思へば、山容水態、頓に悲凄の氣あるを覺ふ。

十時加治木に着し、船を辭し、隊を整へて其蒲生田街に至り、以て一時間の休憩を取る、聞く、坂路是より頗ぶる嶮なりと、乃ち靴を背囊に緊ゑ、輕く青鞋を穿ち、銳を倍して以て令の出るを待つ。加治木は隅州第一の市なり、戶數一千餘戶、蛇岳其東よあ

り、全山皆岩、兀として中天を貫く、薩人の所謂天のじや山是なり。

十一時發ち、途に加治木高等小學生の迎ふるあり、禮して過ぐ、行くこと數丁、足指頓に仰ぐ、是より曲折上下、頗ぶる行歩に艱む、加ふるに炎威灼くが如く、流汗衣を徹し、泉の掬すべきなく、樹影の息ふべきなく、備さに苦辛を嘗む、偶々訇然たる聲を聞く、坂路一轉すなば、轟然一瀉、白龍の溪間より躍れるなり、雲起り、風來る、名けて祇園瀑と云ふ、是に於て一聲快と呼び、氣勢復盛なり。

時正に午を過ぎ、腹底已に拐然として一物なく、坂路愈々崎嶇、而して炎威益々加わり、流汗少時らくも歇まず、山頂に至る頃には、氣勢既に頗ぶる衰ふ。

山頂には茶店數軒あり、小山田村と云ふ、分つて之に入ると、衣を脱して之を乾かし、顆りに桶水を汲む、息ふこと三十分餘、晝餐を喫し終ると、鋭を養ふて出づ、是より坂路漸やく下り、加ふるに老松路畔に並び、以て日光を遮ぎる、偶ま右方遙かに二山並立し、屹として群峯亂山の中に聳ゆるを見る、即ち霧嶋岳なり、其東なるものは即ち高千穗嶺にして、其西なるものは即ち韓國岳なり、直立五千三百尺、山容自から凡ならざるを覺ふ。

石原竹子の諸村に小憩し、午後五時に至りて、横川に着し、分つて宿に就く、歸鳥宿林を索むるの時なり。

此日一行の小山田にあるや、前程を野人に問ふものあり、曰く僅かに二里に過ぎずと、更に半里を經て、再び之を村人に糺せば、猶ほ三里を越ゆると答ふ、怪訝措く能はず、既にして之を聞けば、此邊猶ほ舊に依り、五十丁を以て一里となすものあると云ふ。

横川は亦百二都城の一なり、肥薩の要道に當る、家屋清麗、皆新築に係る、怪しんで之を村翁に聞々ば、客年三月、山口橋以南皆一火に附す、元と寒村見るに堪へざりしが、祝融氏却つて此驛の爲めに、今日の美觀を呈せしむと。

十六日

晴、林鴉夢を破る比、喇叭頻りに起床を促がす、乃ち床を出で、戸を推せば、村落處々に炊煙の上るを見る、朝餐を終え、七時出發す、直に街道を折れて山路を取る、蓋し捷徑に依るなり。滿山の草葉、今將に黄ならんとし、玉露之に結び、日光之を射りて、累々珠光を綴る。丘上に至れば滿眼總て山、起伏波瀾の如し、而して獨り霧嶋岳は其中に立ちて、巍然雲を凌ぐ、恰かも一將胡床に坐して、万卒を指揮するものゝ如き。蓋し斯の如きの地、當年熊襲の據て以て猖獗を極めし處歟。

山を下りて街道に遇ふ、此時好事者五六輩、皆劍を銃に篏し、來りて旗手の下に集まり、以て龍旗を護せんと乞ふ、中隊長卽ち之を許す、是に於て始めて護騎兵の設あり、劍光粲然、校旗是より一段の光彩を加ふ。

九時栗野に至り、小憩を取る、栗野亦三州の一都城なり、島津義弘の大友氏の軍と戰ふて之に勝つの地、村童今に勝栗野を歌ふ。

此邊一帶の地、大弓甚はだ流行し、人毎に勁弓猛箭を携ふを見る、之を里人に聞けば、答へて曰く、客年寒冒頻りに流行す、故老乃ち告げて曰く、家毎に弓箭を作り、以て天地四方を射ま、彼の疫神を逐ふべしと、卽ち之に從ふ、是より遂に今日の流行を來せりと、流行の由て來る所、亦奇なりと謂ふべし。

栗野を出で西する數丁、一川の南より來るに遇ふ、卽ち仙臺川なり、川は九州第一の長流、（最近の調

査に依れば)、急湍石に激し、奇觀言ふべからず是より岸に沿ふて上る、淙潺の聲常に耳に在り、岩倉村に至れば、新道未だ成らず、今方に開鑿に際し、大石の前に當るあり、老樹の途より横ふあり、溪流の道を斷てるあり、急斜深潭に臨むの地あり、一行此間を魚貫し、隊伍頗ぶる亂る、十一時なる比、川添村に至り、舊道に遇ふ、乃ち小憩を命じ、伍を調へて半里吉松に至り、以て晝餐を取る。此地已に日向に屬す、「武威既得薩隅野、一路揮鞭入日州」。零時半を以て發す、途に諸縣高等小學校生徒の出で、送るあり、禮して過ぎ、未だ二時ならざるに既に吉田に着す。

十七日

曇、七時發す、吉田より肥の人吉に至る二道あり、一を加久藤越と云ひ、一を吉田越と云ふ、前なるものは迂、後なるものは捷、迂なるものは平坦にして、捷なるものは嶮峻なり、乃ち嶮なるものを取る、聞說く、吉田越は我國有數の嶮路、健馬壯丁、唯僅かに之を越ゆと、是を以て、一行皆勇を鼓して行く、膝畦愈々小にして伍列愈々長し、仙台川を渡れば地勢漸やく高く、仰げば則ち、山路羊腸、遠く中天にあるを見る、乃ち步を緩にして上る、地勢愈々高うして坂路愈々峭絕、眞に聞く所に背かざるあり、其最とも甚しき所に至れば、前人の踵は正に行人の肩と相接す、上る益々高くして、銃劍背囊重さ平日に倍するが如し、是に於て、或は敵を追ふに傲ひ、或は兎を逐ふに擬し、大呼勇を鼓して上る、會ま旅客三四名、五步一息十步一憩、杖に賴りて漸やく登るに遇ふ、頻りに吾行の壯なるを羨やむ、然れども漸やく山頂に達する頃には、全軍已に寂として聲なく、只氣息の益々高きを聞くのみ、此日天公層雲を贈りて、一行の爲めに光輪を蔽ふ、是

を以て僅かに熱煩の苦を免かるを得たり。

山頂に至れば、四望空濶、諸山皆我に對して環拱起伏するを見る、仙台川は蜿蜒蒼龍れ如く、其間を貫流す、而して、山村水郭皆悉く太平の象あるを覺ふ、指を屈すれば今日は是れ神嘗祭なりしなり。

「峻坂何妨行伍整、亂峯一路入肥州」、是より山路漸やく下り、歩調前に倍せ、此時密雲急に山を閉ざし、輕雨面を撲ちて來る、雨を冒して下ること數丁、忽ち翳然たる森林に入る、老樹森々、蔭翳甚はだ晦し、途愈々進めば林樹愈々密なり、而して雨も亦愈々密、是に於て樹滴紛々、落ちて襟に入り、山氣甚はだ冷やかなり、乃ち外套を着け、行くこと、半里、漸やく林を出で、左より澗水の來るに遇ふ、乃ち之に沿ふて下ること一里、十二時大河間(チーコマ)に至る、此地吉田を距ること四里有半、一行此に至りて始めて人家を見る。

即ち民家に入り、火を燃して暖を取り、携ふる所の搏飯を出して之を食ふ、息ふこと一時間餘、霽を待ちて發せんとす、然れども淫雨少時らくも歇まず、乃ち雨を衝いて出づ、是より足指復た仰ぐ、之を古佛頂越と云ふ、上る緩にして下る急、而して前にと翎然たる深澗をなし、一たび歩を誤まらば生死知り易からざるなり、而して山路灣悪、常に滑澁をして止まず、乃ち足を窘して行く、是を以て山雨の觀、松濤の聲、終に我耳目を奪はざるなり。

已に之を下り、顧みて山を見れば、陰雨山を籠め、變幻態をなし、而して身の何れより來るを知らざるなり、行くこと半里、烟雲の中、遙かに人吉の市街を見る、乃ち鋭を倍して至り、三時人吉に着し、其の九日街に至りて分宿す。

人吉に至る比には、衣裳既に雨に沐し、濕氣肌に徹し、身軀全く冷え、手足爲めに氈ふ、既に宿に入り、

直ちに衣を脱して之を乾かし、沐に入りて暖を取る、生氣此に至りて始めて舊に復す。

此夜雨終に歇まず、「堪憐一夜他鄉雨、掾滴通宵落有聲」。

十八日

晴、卽ち昨日の雨を忘る、試みに客舍の樓上より、玖摩川山色を望めば、空齋將軍が「占得玖摩川上秋」の感あり。本部令を傳へて曰く、九時に至る迄市街の散策を許すと、乃ち皆相携へて人吉城址に至る、城は高丘を負ひ、急流に臨む、所謂山河襟帶、自然に城堡を爲すものなり　建久以來、長く相良氏の居城たりき、今や處々荒池を殘して、一帶の地廡穀之に雜生し、人をして感慨に當年の盛を追懷せしむ、「荒池水靜秋蕭瑟、此是當年人吉城」。

是より市街を散策す、人吉町と土地山間に僻在せりと雖ども、繁盛遠く沿海の地方に越え、戸數二千餘、街衢甚はだ端正なり、郡役所裁判處電信局等あり。歴觀未だ終らざるに、嘯叫頻りに參集を促かす、卽ち宿に歸り、背嚢を負ひ銃を取りて出づ、隊伍既に成り、橋を渡り堤を下れば、輕軻二十艘、已に艤裝して待つ、乃ち之に乘じ、呼聲水聲と和して下る、橋上には觀者山の如く、頻りに鯨波を揚げて、以て我行を壯にす。

船は薄板を以て作り、狹長にして僅かに十餘名を入るべし、而して一艇には必らず二人の舟子を要す、一は艫に在りて櫨を漕ぎ、一は舳にありて梶を取る、皆操縱甚はだ熟す。舟子乃ち告げて曰く、靜坐動くなかれ、水波亂れて船に入るも、以て意とするなかれ、両側には須く輕重なかるべき、水を掬せんことを試むるなかれ、意を銃器背嚢に注げよ、然らずんば飛んで水中に入るあらんと、皆之を諾す。

川と天下三急流の一なり、快駛迅急、所謂水流如矢

万雷吼の觀あり、而して両涯には長巒短巘、高低相列なり、老松生じ、奇瀑懸り、松籟之謖々たり、瀑聲は蓼々たり、我爲めに樂を奏して送迎の禮をなすものゝ如し、而して輕軻其間を下れば、左右の峯巒、皆な一時に後に走り、「両岸如行身不知。」忽ち急灘に及べば、船は一層の速なるを加ゑ、恰も羽箭の弦を離れたるが如く、瞑せずんば將に眩せんとす、而ゑて飛珠舟に入り、衣裳皆濕ふ、此を過ぎ、顧て後船の此境に及ぶを見れば、船は浪花の中にあり、水浪の飜弄する所となり、危殆視るに堪ねず。石は皆奇狀百出し、或は蟠龍の如きもの、或は蹲虎の如きもの、或は怪物の如きもの、或は妖獸の如きもの、或は起て將に倒れんとするもの、或は倒れて將に起きんとするもの、或は両々相角するが如きもの、或は數石其長を校するが如きもの、或は折裂して窪然洞をなすもの、或は亭々特立して群小を睥睨するもの、變幻態をなゑて、水上に簇出す、人を之て一々應接に暇あらざらしむ。偶ゑ異禽數十あり、來りて水を拍ち、忽ち石上に飛び、翺翔和鳴し、凄絶の中別に景致を添ふ。而ゑて船は常に石に向ふて進み、將に之に觸れて齏粉せんとするに至り、操柁一轉、巧みに之を掠め去る、人をして危機一髪の感に堪へざらしむ。

槍倒に至れば、水流深く涯を穿ち、石根上より之を蓋ふ、斯の如きもの數丁、仮令侯伯の船と雖ども、此境に至れば、皆其槍を倒さざるべからず、故に此名あり。時已に午を過ぐ。乃ち晝餐を取る。下ること數丁、岩上一小祠を認む、舟子說いて曰く、加藤清正、嘗て玖摩を征せんとゝ、上りて此處に來り、天嶮此の若く壯なるを見て、終に其望を絶ちて去る、祠は後人の紀念に資するなりと。

岩戸の洞窟に至り、陸に上りて之を見る、深さ數

丁、高さ大旆を樹つべし、亦一奇觀なり。觀全く終り、復た船に上る、下る數丁、偶ま水に面して茶菓を賣る者あり、乃ち之に就き、雜菓を買ふて發す、神瀬に至れば、水流急に右に折れ、怪石亂立し、水波頻りに驚ろき、盪搖甚はだ盛あり、而して暗礁水中に立ち、船底砉然聲を爲す、此は是れ玖摩川第一の難處たるあり。之を過ぐれば、両涯次第に濶きを加へ、水勢漸やく緩となる、而して岸上には村家愈々多きを加ふるを見る。

五時府本に至り、眼界頓に開け、四望空濶、遠く西天を望めば、落暉苓州の山に臨み、返照暮雲を射りて、金光燦々たるを見る、快意言ふべからず。

五時半八代に着し、舟を辭して陸に上り、其本町に至りて宿に入る。人吉より八代に至る、陸路二日の程なり、而して今半日にして至る、亦以て其快やきを知るべきなり。

八代は繁盛、遙に人吉に勝る、憾むらくは、其市街を散策して其全豹を知るを得ざりしとを。

十九日

晴、金風習々、正ま秋の冷なるを覺ふ、七時整列す、期に後る者あり、措て發す、町を出る數丁、路傍に官兵の墓地あり、一揖して過ぐ、是より道分をて二となる、右すれば宮原に至り、左すをば鏡町に至る、右は迂遠にして、左は捷徑なり、乃ち左して行く、千把を經て新牟田に至り、息ふこと十分餘、是より道は田塍の少しく濶なるものとなり、伍をなして行くべらず、乃ち隊を解き、一人づゝ行く、是に於て全軍數丁に亘り、玆ま一場の奇觀を呈す。

途は平原万頃の中まあり、列峙其東に秀で、蒼溟其西を洗ふ、野水其間を交流し、水隈處々、林樹叢をなし、田家其中に隱見す、田疇錯落、塍畦縱横し、而して田村今方に秋獲に際し、里僮村翁皆牛馬を逐

ふて行く、面致言ふべからず。九時鏡町に入る、鏡町と運河海に過じ、頗ぶる舟揖の便あり、旅客常に絶えず、人家四五百、皆殷富屋を潤すを見る、鏡が池は町の東端にあり、清洌掬すべし。

息ふおと廿分、卽ち發す、途に代北高等小學生の迎ふに遇ふ、禮して過ぐ、氷川橋を越へ、行くこと數丁、砂川に至れば、橋の架するなき、卽ち之を亂つて渉る、是より途と所謂鎗柄通りと稱するもの、一路直行す、豊水に一憩し、正午松橋に達す、至れば既に休憩處の設あり、乃ち之に入り、搏飯を喫し終をば、令あり、曰く、猶ほ三十分の休憩を命ずと。

松橋は熊南の要路に當り、人家櫛比、商賈頗ぶる繁盛なり、深く海水を誘ひ、帆檣林立す、航路多くは肥南薩北の地と通ず。

一時に至りて發す、行くこと半里餘、眼を放てば、微茫遙かに我龍山を認む、「人をぞ松の立田山」、覺ず一聲快と呼ぶ、二時宇土に至り、分宿す。

宇土は木原山に麓にあり、往時小西行長の居城なり、加藤清正奪ふて之を領す、細川氏に至り、今の細川子爵世々此地に居る、市街と松橋と伯仲の間にあり。木原山一に雁回山と云ふ、相傳ふ、昔時八郎爲朝の居を此地ゑトをるや、過雁其射を恐れて、皆迂回して去る、故ゑ此名ありと。

此夕出でゝ街巷を散策し、折れて野外に出づれば、平野千里、方に日影暮色の中ゑあり、連山一帶、方に半明半暗の境にあり、好景画も知らず。

二十日

曇、七時出發せ、行路尤矣平坦砥の如し、此行常に崎嶇凹凸の山路を取り、若くば湫隘濘悪の田塍に依る、而して今濶坦斯の如きに遇ふ、殆んど行歩の苦を知らず、行くこと數丁、燕群數萬、個々相接し、路傍の電線に息ふを見る、恰も我軍を待つものゝ如

し、試に銃を擬して一聲を放てば、數羽忽ち飛び數羽飛ぶあれば、全群直ちに之に從ふ、全群飛翔すれば、全く天を蔽ひ、白日爲めに黑きを覺ふ、散れば復集まり、集まれば復散る、集散離合、吾一行と先後相追ふと十數丁、亦一ケの好奇觀なり、「好鳥成群亦朋友」。八時を過ぐる頃、川尻に着し、小憩を取る、廿分を經て發す。途、眼を遠近に放てば、故山の秋色、舊に依りて益々妍なるを覺ふ、發するに臨みて我を送るもの、今は喜色、我を迎ふるものゝ如し、是に於てか、軍歌の韻、行步の調、自から前日と異なり、悉く愉色あり、一時間を經て春日に到る、一憩を命じ塵を拂ひ劍を正し、以て戎裝の亂れたるを調へゝむ、乃ち發す、此時輕雨少しく濺き、恰かも我行の爲めに、市塵を清めて以て之を迎ふるものゝ如し、停車場の前に至れば、櫻井教授本田舍監は、事に由りて此行に從ふを得ざるもの五十余名を率ゐ、整列して我を迎ふに遇ふ、卽ち相對し捧銃の禮を行なひ、相見て一笑す、旅客家人に迎へらるゝと一班、卽ち相合し、隊伍整々、喇叭劉喨、揚々として市中に入る、觀る者皆吾行の山海萬里を跋渉し、餘勇猶若く壯なるに驚く、龍旗風に翻り、行調亂れず、肅々校門に入る、時正に十一時、乃ち圓陣を前庭に作り、嘉納學校長及び櫻井教授、各々一場の演說あり、既に之を終れば、令を下して全たく隊形を解く、怡色面にあり、溢喜禁せず、鯨波頻りに起り、龍麓白湄、此に旬日の寂寞を破る。

此行經る所、三縣四國九郡に亘り、海路一百里、陸路四十餘里、玖摩の水路は十有六里、其水路は概ね澎湃轟豁、其陸路は概ね崎嶇峻嶮、而して其の見る所、其聞く所、吾人を益するものに至りては、亦何ぞ數ふるに勝えんや。

（完）